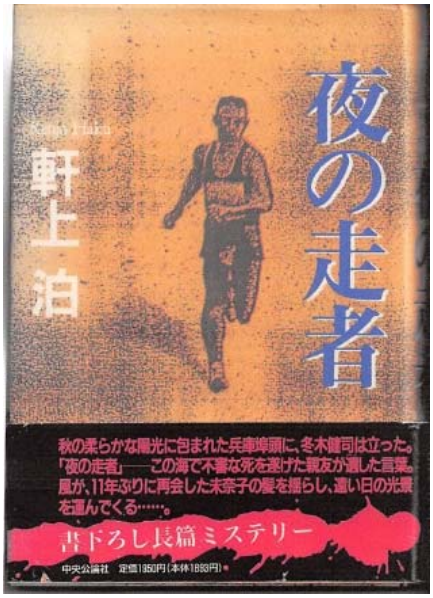
走り読み文学探訪リバイバル(その2)

「夜の走者」　著者　軒上泊(Kenjo Haku)

中央公論社(1996.10.7 発行)1,893 円＋税(368p)　紹介者:榎本博康

[紹介]

喫茶店「回転木馬」の冬木健司は，孤児として同じ施設で育った元井孝男が死んだとの連絡を，田沢未奈子から受ける。車ごと兵庫埠頭で海に落ち，事故死とされたのだが，そこに殺人の意図を感じるというのだ。冬木と元井は兄弟のように育ったが，いつしか二人の間に未奈子が居て，未奈子は元井を選んだのだった。そして11年，事件の真相解明を冬木に頼ってきたのだった。



元井はフリーのライターになり，生活のために週刊誌の記事などを書き散らしていたが，反沢健一郎というペンネームで，本を出す準備をしていた。そして「夜の走者」との題名だけが書き残されていた。

次第に調査が深まると，そこに人工血液開発にからむ陰謀と，現在(1983 年)まで続く，戦争中からの日本の暗部が黒々と見えてきて，天才ランナー「夜の走者」の家系を襲う不幸が，一連の意図と共に明らかになってくる。

[感想]

昨年(1996 年)に雑誌ランナーズの書評で紹介された本で，ランニング小説を読み漁っている私としては，さっそく購入した。

この本はトリックを駆使したサスペンスであり，種あかしをしてしまっては，これから読む人に失礼なので，そこを回避しながらお話をしなければならない。しかし，この話の価値は，そのトリックにあるので，残りの部分を語ることが，果たして適切かどうかと悩む。

そこでまず，ランニングという面から考えたい。この本は不幸な出生の青年が，天才的な走りによって世に出ようとするシンデレラ・ストーリーが一つの軸である。そのような意味では，ボクシングで彗星のように新人が現れると，シンデレラ・ボーイと呼ばれるように，他のスポーツでも良いのだが，マラソンは予選なしに全員が決勝に出るわけで，ボクシングのように実績を積みながら上昇するのではなく，全く無名の選手が勝利する可能性がある。参加資格は，過去の公認記録が基準に満ちていれば良く，しかもハーフなどの記録でも良いので，本当にシンデレラ・ボーイやガールが出現し得る。そのようなマラソン競技の特性が，うまくシンボルとして扱われている。

ただ，残念なことに作者はランニングの経験者では無いのだろう。この話の中に，ランナーの走る喜び，走る苦しみはない。夜の走者は，主役ではなく，上記のシンボルを背負って，ストーリーに一貫性を持たせることにのみに役割がある。この話に，ランナーの息づかいは聞こえてこない。

逆に，一般の人の考えるランニングがどのようなものかが分かる。夜に孤独に練習を重ねるランナーは，イメージとしてはあり得るが，それで一流の実力をつけるのは，いかほどの天才でも不可能だろう。しかしこの話の中では，さほどの違和感なく語られている。マラソンって，こんなに暗くて安易な

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

スポーツと捉えられているのだろうか。

このような浅さを補うためか，シンボルの強化のために，円谷幸吉の遺書が引用される。だが，これは止めてほしかった。孤独なランナーというキーワードでいかにも共通しそうが，この話で語られるものとは異質である。

同様に731細菌部隊が悪として使われるが，説明不要の「便利な悪」として使われているような気がする。そして同時に登場する従軍慰安婦は同じく説明不要の「便利な弱者」である。

再度確認するが，この本はトリックを多彩なプロットの中で仕掛けるのが狙いであり，人物描写やレトリックに期待するものではない。ましてマラソンの本ではない。そのような娯楽小説であるが，何か心に残る物が欲しいと思うのは，読者の願いである。トリックにはまった時の心地良さはあったが，その他の点では得る所が乏しかった。

また，カバーの絵のランナーの走り方がおかしいのも残念である。

(1997.4.15)

[リバイバル感想]

娯楽作品がどこを狙うかは、重要な課題である。私は新たな悪の発見のような作品（例えば「白い巨頭」を念頭に置いているが、）が好きだが、本書のように誰でも知っているような社会の共通認識（これを便利な悪や便利な弱者と呼んだが、）を土台にして物語を展開することは、大幅に説明が省略できるのでストーリー展開の勢いをつけることができる。

この小説で使われる便利な悪が時代と共に変遷していくことに着目するだけでも、ちょっとした論評が書けるだろう。この走り読み文学探訪の中でもしばしば触れることになる。

ランニング文学探訪のテーマである、フィクションで描かれるランニングという視点からは、本書のランニングもおそらく便利なシンボルであり、本書が期待する読者層が既に抱いているだろうイメージを最大限に利用しようとしている。例えばボクシングでは明日のジョーのようにそのスキルを磨き上げる過程が大きな見せ場であるが、ランニングではいきなり天才的な走りをしてしまう主人公が多い。そこにランニングというシンボルのひとつの特性がありそうだ。

従って本書の価値はストーリー展開とそこに秘められたトリックにあるが、そこを論じることは目的では無いので、各読者にご評価いただきたい。

なお本書は古本としてしか、手に入らないようである。

(2020.5.30)

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.